

集団内のコードとしてのコードスイッチング発話

——日本在住コリアンのニューカマーにおける
言語シフトの実態把握に向けての予備的考察——

Code-Switching Utterance as the “In-group Code”:

Preliminary Study for the Grasp of the Situation of Language Shift among
the Korean Newcomers in Japan

吉田 さち

Sachi YOSHIDA

要 旨

1980 年代以降、日本在住コリアンのコミュニティにおいてニューカマーの割合は年々増え、定住化もすでに始まっている。ニューカマーのコミュニティの言語シフト (language shift) の実態の解明は他の移住者集団の言語シフトの理論の構築にも寄与すると考えられる。移住者コミュニティに共通する世代間の言語シフトの様相を明らかにするための基礎的な資料として、ニューカマーにおける来日時期によるコードスイッチング (code-switching) の特徴の違いについての研究の蓄積が必要だと思われる。そのための予備的考察として、本稿では、滞日時期の比較的短い留学生を対象として、彼らの CS の特徴について、韓国系民族学校の高校生 (吉田 2005) との比較を通して明らかにすることを目的とした。調査の結果、留学生の談話では主に韓国語が使われており、混用コード (文内 CS を含む発話) が使われる場合も、その基盤言語は多くの場合、韓国語であることが分かった。混用コードでは、韓国語を基盤として日本語の単語を挿入するという、挿入型 CS の性質が強かった。この特徴は、臨界期以後に来日した高校生と類似するものの、臨界期以後に来日した高校生以上に、発話での韓国語使用の割合や文内 CS での日本語の単語への切り換えの割合が高かった。つまり、臨界期以後に来日した高校生よりも留学生の方で使用言語がより韓国語中心だと言える。この理由として、混用コードが集団内のコードとして定着しているか否かが影響しているものと考えられる。高校生の間では集団内のコードとして混用コードが使用されている。それに対して留学生の間では場面に応じて韓国語か日本語の一方を選ぶ傾向が強く、混用コードが集団内のコードとして使用されていないものと考えられる。

1. はじめに

現在、日本国内には、およそ208万人(総人口の1.6%)の在日外国人が居住している(法務省 2012)。日本では歴史的にアイヌ、コリアン、中国人などのコミュニティが形成されてきた。とりわけ、1980年代以降に来日した「ニューカマー」と呼ばれる外国人の増加と定住化によって、日本社会の「多民族化」は急速に進展している(渡戸 2010)。

だが、日本には移民法は存在せず、公に移民の存在は認められていない。加藤(2010)によると、日本で移民の存在が公的に認められず、外国人住民が一時的滞在者と見なされてきたのには、戦後の日本社会で「単一民族神話」(小熊 1995)の言説が広まったことが影響しているという。

ところが、この20年ほどの現実には明らかにこれとは相反する方向に進んでいる(加藤 2010)。かつては、日本在住コリアンのオールドカマーを中心とする「特別永住者」と呼ばれる人たちが外国人登録者中の最大カテゴリーだった。しかし、近年、主としてニューカマーから成る「永住者」が急増し、2007年末には、「永住者」が外国人登録者中の最大カテゴリーとなっているのである(加藤2010)。

在日外国人のなかで大規模なコミュニティを形成している日本在住コリアンにおいても、ニューカマーの割合は年々増加し、定住化がすでに始まっていると指摘されてきた(梶田 1994)。それにも関わらず、社会言語学における日本在住コリアンの言語に関する研究は、オールドカマーと呼ばれる人々を対象としたものが主流であった。

今後ますます増加・定住化が進むであろうニューカマーのコミュニティの言語シフトの実態を解明することは、日本在住コリアンの言語シフトの全体像に迫るためには欠かせないであろう。日本在住コリアンの二言語併用の全体像の解明は、日本における他の移住者集団の言語シフトの理論の構築にも寄与することと思われる。したがって、「ニューカマー」の言語シフトの実態を把握することは、社会言語学の領域において緊急の課題であると言える。

2. 本稿の目的

多言語コミュニティにおける普遍的な現象として、同じ談話のなかで、さまざまな要因により、ある言語が別の言語に切り替えられるコードスイッチング(code-switching、以下「CS」)がある。

多言語コミュニティにおけるCSのパターンは、話者の言語能力と大きく関わると言われている(Poplack 1980)。移住者の集団では、個人の言語能力に移住した時期が大きく反映されるため、移住の時期によってCSのパターンが異なるということがこれまでの研究で明らかにされてきた(Li Wei & Milroy 1995, Backus 1998)。

Singh & Backus (2000)によると、多言語コミュニティの日常語はL1を基盤とした挿入型のCS

(insertional CS) から、二言語の能力が高まるにつれて、交替型の CS (alternational CS) へ移行する一般的な傾向があると言われている。

日本語と韓国語の CS についての研究は、黄鎮杰 (1994)、金静子 (1994・2000)、김정자 (2002)、都恩珍 (2001)、郭銀心 (2002)、金美善 (1998・2000・2001・2003) 等により談話資料をもとに進められてきた。これらの研究ではオールドカマー一世や三世が主な対象とされ、ニューカマーはほとんど視野に含まれてこなかった。また研究内容としては主に切り替え項目の実態解明に焦点が当てられてきており、話者の来日時期⁽¹⁾ が CS にどのような影響を及ぼしているかについての研究はほとんど行われていなかった。

ニューカマーにおける来日時期による CS の特徴の違いを探ることは、移住者コミュニティに共通する世代間の言語シフトの様相を明らかにするための基礎的な資料となりうると思われる。そこで、吉田 (2005) では、韓国系民族学校の高校生において、来日時期による二言語の能力が言語選択と CS にどのように関わっているのかについて、談話資料に基づく事例研究を通して考察した。

その結果、来日時期により、発話で選択される言語や CS の特徴に違いがあることが確かめられた。韓国系民族学校高校生の CS の特徴は、世界の移住者集団に共通する特徴である、「L1 を基盤とした挿入型の CS から交替型の CS へ移行する一般的な傾向」(Singh & Backus 2000 : 74) を支持するものであった。

つまり、韓国系民族学校の高校生の間でも、来日時期が早くなるに従い、韓国語の発話に日本語の要素を挿入するタイプの CS から、韓国語と日本語を発話内で交互に切り替えるタイプの CS に移行する傾向が見られた。

しかし、ニューカマーのその他の集団において、来日時期により CS の特徴に違いがあるかは明らかにできなかった。ニューカマーが移住者集団として定住化していくとともに、世代間で使用される言語はどのように変化していくのだろうか。世代間の言語シフトの様相を明らかにするためには、属性の異なるさまざまなニューカマーの集団の CS の特徴を明らかにする必要がある。

そのための予備的な調査として、本稿では、滞日時期の比較的短い留学生を対象として、彼らの CS の特徴を明らかにしたい。さらに、吉田 (2005) で報告された韓国系民族学校の高校生の CS の特徴との比較を行い、両者の異同を明らかにする。

3. 日本在住コリアンのコミュニティ

日本在住コリアンのニューカマーを対象とした考察を行うにあたり、日本在住コリアンがどのような人々なのかについて確認しておく。

法務省 (2012) によると、2011 (平成 23) 年度末現在、韓国籍・朝鮮籍を持つ人々は 545,401 名

となっている。これは外国人登録者の総数の26.2%にあたる。本稿では、彼らを日本在住コリアンと称することとする。統計上の数値には、日本国籍取得者（「帰化」者や国際結婚による、いわゆる「ダブル」の子どもたちなど）や超過滞在者などは含まれていない。すなわち、朝鮮半島にルーツを持つ人々の数は、実際にはこの数値よりも多くなる。梁泰昊（1996）は、潜在的に見れば日本在住コリアンは100万人を越すのではないかと述べている。

日本在住コリアンは来日時期によって、オールドカマー⁽²⁾とニューカマーに分けられる（金美善 2009）。以下では、金美善（2009）の記述に基づいて、オールドカマーとニューカマーがどのような人々なのか簡潔にまとめる。

金美善（2009）によると、オールドカマーは来日時期によってさらに二段階に分けられるという。まず、日本の植民地支配による生活苦や強制連行など歴史的な事情によって来日した一世とその子孫で構成されるグループが存在する。そのほとんどが朝鮮半島の南部地域の出身者であり、大阪、東京、兵庫、愛知など各地に集住地域がある。

もう一つのグループは、終戦後に同郷の在日コリアンや親族の呼び寄せによって、あるいは在日コリアンと婚姻関係を結ぶことによって来日するに至った人々である。その中には、在日コリアンコミュニティを頼って来日したいいわゆる「密航世代」も含まれる。このタイプの来日は、終戦後からニューカマーの来日が始まる時期まで継続していたと推定される（金美善 2009）。

一方、ニューカマーは、1989年の韓国の海外旅行自由化に加えて、日本のバブル景気に伴う社会的制度や経済的状況に誘発されて来日した人々である。彼らの大部分が、留学生、駐在員、日本人や永住者の配偶者などによって構成されるという（金美善 2009）。

なお、一般に、留学生や公務や企業による海外派遣者（駐在員）などは、「一時滞在者」（sojourner）と呼ばれ、「移民」とは概念的に区別されることが多い（渡戸 2010）。しかし本稿では留学生をニューカマーに含めることとする。その理由は以下の通りである。留学生は、日本に定住しているニューカマーとの社会的ネットワークを構築し（藤巻 2012）、日本在住コリアンの言語使用上の変化に影響をあたえている（金美善 2009）存在である。したがって、彼らは一時的滞在者としてよりも、ニューカマーとして位置づけることが妥当ではないかと考えられる。

4. 研究方法と分析の枠組み

4-1. 調査方法

分析には、録音した談話を文字化した談話資料とフォローアップアンケートを使用する。談話の録音とフォローアップアンケートは、2008年に大学や寮で実施した。談話資料は親しい友人関係の女子留学生2人1組のそれぞれ40分程度の対話を3組分、録音・文字化したものである。親しい友人

関係に限定したのは、コードスイッチングは、互いに親しく、教育・民族・社会経済的な背景を共有している人のくだけた系和の中で頻繁に起こるとされるためである（Hoffmann 1991）。

録音に際しては、特に話題を指定せず、普段休み時間におしゃべりする時のように話してもらうよう指示した。録音場所には、話者 2 人以外の人のいない部屋を使用した。

調査対象者の内訳は表 1 の通りである。

表 1：調査対象者の内訳

話者番号	FS1	FS2	FS3	FS4
来日時期	臨界期 ⁽³⁾ 以後	臨界期以後	臨界期以後	臨界期以後
二言語能力	偏重	偏重	均衡	均衡
母語	韓国語	韓国語	韓国語	韓国語
学校	大学院	大学院	大学院	大学院
年齢	29 歳	33 歳	30 歳	31 歳
父母出生地	韓国	韓国	韓国	韓国
未婚／既婚	未婚	未婚	未婚	未婚
在日年数	5 年	2 年	6 年	6 年
第二言語学習期間	4 年	4.8 年	2 年	0 年

話者番号	FS5	FS6
来日時期	臨界期以後	臨界期以後
二言語能力	偏重	均衡
母語	韓国語	韓国語
学校	大学院	大学院
年齢	31 歳	32 歳
父母出生地	韓国	韓国
未婚／既婚	未婚	未婚
在日年数	3 年	5 年
第二言語学習期間	不明(日本で独学)	1.6 年

表 1 から分かるように、調査当時において、6 名とも日本の大学院に在学している大学院生である。6 名の年齢は 20 代後半～30 代前半であり、全員未婚で一人暮らしをしている。

調査対象者の母語とバイリンガルの言語能力は、フォローアップアンケートの回答に従って判断し

た。バイリンガルの言語能力の判断基準としては、基本的に第二言語の四技能すべてについて4段階（よくできる・ある程度できる・少しできる・全くできない）中最も高いレベルにあると回答した場合には均衡バイリンガル、それ以下のレベルにあると回答した場合には偏重バイリンガルに分類した。その結果、偏重バイリンガルと均衡バイリンガルが3名ずつに分かれた。偏重バイリンガルは在日年数が2年～5年と比較的短い話者であり、均衡バイリンガルは在日年数が5～6年と比較的長い話者であった。

各対話における話者の組み合わせは、FS1とFS2、FS3とFS4、FS5とFS6の3ペアである。本稿の分析では、留学生3ペアを対象として、発話単位の言語選択および文内CSの実態に焦点を当てる。

4-2. 分析の枠組み

はじめに、CSの定義について見ていく。CSの定義は、研究者の間でしばしば議論的とされてきた(Malik 1994)。Romain (1995) や Hamers&Blanc (2000) は、最も妥当な定義として Gumperz (1982 : 59) による以下の定義を挙げている。本稿でも、CSの定義は Gumperz (1982 : 59) の定義に従うこととする。

The juxtaposition within the same speech exchange of passage of speech belonging to two different grammatical systems or sub-systems.

CSは、切り替え位置により次の3タイプに分類される (Poplack 1980)。

- (1) 文間切り替え (inter-sentential switching)
- (2) 文内切り替え (intra-sentential switching)
- (3) 付加型切り替え (tag-switching)

上記(1)の文間切り替えは、文境界での切り替えを指す。過去の研究では節境界で起こる切り替えも文間切り替えの範疇に含めることがあった (Poplack 1980, Romain 1985)。

しかし本稿では、節境界での切り替えは文内切り替えに含める。これは日本語や韓国語の複文において、個々の節の独立性が印欧語のように強くないためである (亀井他 1996)。

(2)の文内切り替えは、形態素、語、句のレベルで切り替えが起こっているものを指す。上述の通り、本稿では文内切り替えに節境界での切り替えも含める。

(3)の付加型切り替えには、感動詞や挿入語句、付加疑問などでの切り替えが含まれる。以上の3タイプのうち、本稿の分析では文内切り替えを扱う。

CS と借用との区別は、次のように行う。借用は、Grosjean (1995 : 263) による「他の言語から語や短い表現を取り出し、音韻・形態的に基盤言語の体系に適合させること」という定義を参照する。ただし、本稿では形態的な統合は判断基準とせず、音韻的な適合のみを判断基準とする。つまり CS と借用の区別は、特定の項目が音韻的に基盤言語の体系に適合されているか否かにより、適合されていれば借用、そうでなければ CS とみなすことにする。

本稿では次の例 (1) のような、文化的に新しい事物や事柄を表す「文化借用」と呼ばれる切り替えも基盤言語の体系に適合されていないものは全て CS に含める。

(1) FS1 : 뭐漫才 같은거 있잖아요. (何、漫才みたいなのあるじゃないですか。)

また、外来語も、基盤言語の体系に適合されていない場合は CS とみなす。例えば次の例のように、外来語の部分だけ日本語で発音されているものも CS と判断する。

(2) FS3 : 석사 논문을 또 리바이즈한다 그래잖<아>{<}?. (修士論文をまたリバイズするというじゃない?)

本稿における分析の方法は次の通りである。まず、発話レベルでの言語選択を分析する。発話レベルでの言語選択の分析では、金美善 (2003) に従い、発話ごとの言語を日本語、韓国語、混用コードの 3 種類のコードに分類し、その割合を出す。混用コードは発話内で切り替えが起こっているもの、すなわち、文内 CS の起こっている発話を指す。発話の定義は、宇佐美 (1997) の発話文の定義⁽⁴⁾に従う。

次に文内 CS の実態について分析する。文内 CS の実態の分析では、混用コードについて発話ごとに基盤言語を調べ、基盤言語ごとの切り替え項目の割合を考察する。基盤言語は、①量的に最も発せられた言語、②主節の動詞を提供する言語、③機能語を提供する言語、の 3 点を考慮し総合的に判断する (Muysken 1995, 都恩珍 2001, Azuma 1993 参考)。

また、本稿において、文間 CS は発話単位で言語が切り替えられているもの、文内 CS は発話内で言語が切り替えられているものを指すこととする。したがって文内 CS には、形態素、語、句、節などの切り替えが含まれる。

最後に、談話レベルにおける特徴として、挿入型 CS と交替型 CS のどちらのタイプの切り替えを行っているかを考察する。挿入型 CS と交替型 CS は、本稿では談話レベルにおける特徴とみなす。両者は連続体を成した概念と考えられる。挿入型 CS と交替型 CS の談話の特徴を、先行研究 (Singh & Backus 2000, Muysken 1995) を参照して次のように設定する (吉田 2005)。

挿入型 CS の談話：文内 CS では基盤言語が明確で、基盤言語と埋め込まれる言語が非対称性を帯びている。文内 CS で、単独の項目または二項目が切り替えられる場合が主流である。談話内で使われる言語としては、文内 CS で基盤となる側の言語の割合が高い。例 (3) は挿入型 CS の談話内で見られた発話である。

(3) AC6 : 선생님한테도 相談해 봐야지. (先生にも相談しないと。)

交替型 CS の談話：文内 CS では基盤言語と埋め込まれる言語の非対称性が弱まり、基盤言語が不明の文内 CS の割合が高くなる。談話内の多様なレベルにおいて継続的な切り替えが見られる。談話内で二言語が同程度使用される。例 (4) は交替型 CS の談話の一部である。この例は 3 つの発話から成るが、第一発話と第三発話で交互に二言語が切り替えられ、量的なバランスが保たれている。

(4) BC5 : ぬす, でもねー, なんか, 妹はー, あんまり, 家族, てか, 엄마한테 혼 나면은-
 〈응응응응〉 짜증 내고 그래두- (お母さんから怒られるとー, 〈うんうんうんうん〉
 腹を立てたりするとしてもー), まだ, なんか, あいつはね, [あ] 家族を愛する気
 持ちが, 〈(BC6 笑い) あるんだよ. 私よりは, あると思う. なんか, 어디 놀러 가도
 〈응응응〉 (どこに遊びに行っても 〈うんうんうん)〉, なんかさー, 私はー, 여름 방학
 놀러 못 가잖아- (夏休み遊びに行けないじゃない) ?。

5. 結果および考察

本章では、三組の留学生の CS の実態を見ていく。5-1 では発話レベルで二言語をどのように選択しているか概観する。そのうえで、5-2 以降で具体的にどのような CS を行っているかについて考察する。

分析で比較対象としている高校生のデータは吉田 (2005) によるものである。

5-1. 発話レベルで選択される言語

留学生が発話レベルで選択した、韓国語・日本語・混用コードの割合は、それぞれ 93.7%・0.4%・5.9%であった。このことから、留学生は、留学生同士でインフォーマルな場面で対話する際には圧倒的に韓国語を使用していると言える。

図 1 は、留学生が対話で選択した言語と吉田 (2005) において民族学校の高校生が対話で選択した言語を比較したものである。図 1 において高校生は、来日時期別に、日本生まれのペア・臨界期以

前に来日したペア・臨界期以後に来日したペア・日本生まれと臨界期以後に来日したペアに分けられている。図1によると、留学生は、臨界期以後に来日した高校生よりも韓国語を使用していることが分かる。

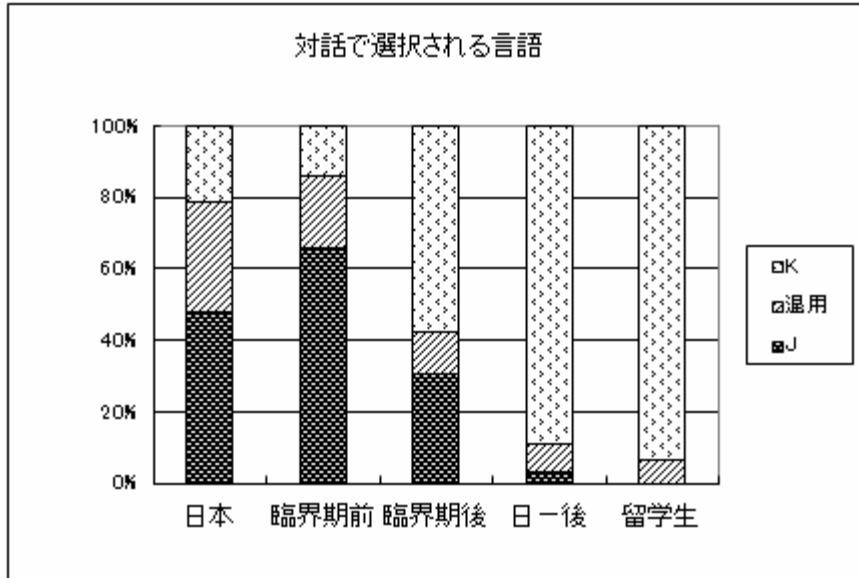


図1：対話で選択される言語

5-2. 留学生のCSの実態

臨界期以後に来日した留学生3ペアのCSの実態を考察する。

表2は発話全体における文間・文内CSの発話の割合を、高校生(来日時期別)と留学生について示したものである。民族学校の高校生のCS発話全体における文間・文内CSの割合と比較してみると、留学生のCS発話は、そのほとんどが文内CSだということが分かる。

表2：CS発話全体における文間・文内CSの内訳

	文間 (%)	文内 (%)	合計 (%)
臨界期以後に来日(AC)	156 (54.4)	131 (45.6)	287 (100.0)
臨界期以前に来日(BC)	119 (30.4)	272 (69.6)	391 (100.0)
日本生まれ(JB)	70 (19.8)	284 (80.2)	354 (100.0)
留学生	9 (5.1)	168 (94.9)	177 (100.0)

文内CSの基盤言語に着目すると、留学生の文内CS発話において、韓国語基盤の発話が141発話

(97.9%)、日本語基盤の発話が 0 発話 (0.0%)、基盤言語が不明の発話が 3 発話 (2.1%) あった。ここから、留学生の文内 CS の基盤言語は、総じて韓国語であることが分かる。

高校生を来日時期別に分けると、基盤言語が韓国語となる割合がもっとも高いのは、臨界期以後に来日したグループであった。臨界期以後に来日したグループにおける韓国語基盤の発話の割合は 74.0%であった。それに対して、留学生の韓国語基盤の発話の割合は 97.9%である。すなわち、留学生の文内 CS における韓国語基盤発話の割合は、臨界期以後に来日した高校生をもはるかに上回っている。

次に韓国語基盤発話における切り換え項目を見ていく。表 3 は留学生における韓国語が基盤となる文内 CS での切り替え項目の割合を示したものである。表 3 を見ると、名詞 (89.0%) の割合がほぼ 9 割と非常に高い。名詞の次に割合が高い項目は節であるが、わずか 4.7%である。つまり、留学生の文内 CS はほとんどが名詞を切り替える挿入型 CS であると言えよう。臨界期以後に来日した高校生の間でも韓国語基盤の発話における名詞項目への切り換えの割合は他の項目への切り換えに比べると高かったものの、6 割弱であった。このことから留学生の文内 CS における日本語の名詞への切り換え率の高さは際立っている。

表 3：留学生の韓国語基盤発話での切り替え

	項目	回数
名詞	名詞	153 (89.0%)
節	引用節	7 (4.1%)
	連用節	1 (0.6%)
	小計	8 (4.7%)
副詞	副詞	3 (1.7%)
	副詞相当語句	1 (0.6%)
	小計	4 (2.3%)
形容詞	形容詞	3 (1.7%)
動詞	動詞	2 (1.2%)
その他	接続詞＋名詞＋助詞	1 (0.6%)
	名詞＋助詞	1 (0.6%)
	小計	2 (1.2%)
合計		172 (100.0%)

《名詞の切り替え》

名詞の切り換えにおいて、どのような名詞への切り換えが行われていたのか考察する。切り替えら

れた日本語の名詞を、その意味により、①学校生活に関する語、②俗語・流行語、③地名・人名、④文化借用、⑤その他に分類し、のべ語数の割合を調べた。その結果、もっとも多いのが地名・人名で 58 語 (37.9%)、次いで、学校生活に関する語で 23 語 (15.0%) だった。

表 4 は、留学生と臨界期以後に来日した高校生を対照させたものである。この表によると、臨界期以後に来日した高校生においては、俗語・流行語の切り換えが行われていたのに対し、留学生では俗語・流行語への切り換えが見られなかったことが分かる。この理由として、本稿での留学生は大学院に通っており、平均年齢が比較的高いため、高校生に比べると日常的に俗語・流行語を使用することが少ないことが影響していると思われる。それに加えて、会話の話題として大学院や研究室の話が多かったことも原因ではないかと考えられる。

表 4：切り替えられた名詞の特徴

	留学生	臨界期以後に来日した 高校生
①学校生活に関する語	23 (15.0%)	14 (19.2%)
②俗語・流行語	0 (0.0%)	14 (19.2%)
③地名・人名	58 (37.9%)	12 (16.4%)
④文化借用	10 (6.6%)	5 (6.8%)
⑤その他	62 (40.5%)	28 (38.4%)

地名・人名や文化借用は、もともと日本語にしか存在しない語であるため日本語に切り替えたものである。それに対して、学校生活に関する語への切り換えが多いのは、留学生たちが日本の学校で学んでいるために、学校や専門分野に関する語を普段から日本語を使用しているためではないかと思われる。例(5)は、その例である。

(5) FS5: <그리고 더 웃긴건>{>} 「人名」이 수시 그- 논문할 때 개가 1월 7일인가 8일날 그때도 15일인가가締め切り였을거야.

(それでもっと笑えるのは「人名」が、随時、その、論文を書くときに、その子が1月7日か8日、そのときも15日だかが締切だったんだよ。)

《引用節の切り替え》

高校生と同様に、会話に臨場感を加える効果があると言われている (Myers-Scotton 1993)、引用節の切り替えも見られた。

- (6) FS3 : 그래서 딱 걸려가지구 맨날 교수님이 “ハア、「人名」さんのことしか、しゃべらないよ、飲み会に来たら。「人名」さん、どうしよう。” 맨날 그런 얘기 하는거야.<二人で笑い>それで、気になって毎日教授が「ハア、「人名」さんのことしか、しゃべらないよ、飲み会に来たら。「人名」さん、どうしよう」毎日そういう話をするんだよ。

上記の例(6)は、同じ研究室の日本人学生の発言を引用している例である。日本人学生の発言を日本語、すなわち、そのときに実際に使用された言語に切り替えることで発話に臨場感が加わっている。

この例のように、日本語話者の発言を引用するのみならず、以下の例のように、自分の発話内容を切り替えている例も見られた。

- (7) FS6 : <笑いながら>그래가지고(<笑い>), 그날은 근데 내가 눈 뜨거서는, [舌打ち] "おまえ、やばい、やばいよ"이러면서(<笑い>), 다시 먹지 말아야지 이러면서 잤는데 이미 때는 늦었지. (それで、その日は、目をあけては、「おまえ、やばい、やばいよ」って言って。もう食べないようにしないとって寝ただけけど、もう手遅れでしょう。)

上記の例では、独話(もしくは思考内容)の部分が切り替えられている。ここでの切り換えは、食べ過ぎた自分に対し、第三者的なもう一人の自分が「おまえ、やばい、やばいよ」と警告する部分である。この部分を切り替えることにより、もう一人の自分のことばを際立たせる効果がもたらされていると言えよう。

《副詞の切り替え》

副詞・副詞相当語句の切り替えは計4件見られた。

- (8) FS3 : 나처럼 あっさり 1년(어) 이러면 그게 되잖아. (私みたいにあっさり一年こうしたらそれがいいじゃない。)

上記の例は、副詞「あっさり」への切り替えは、CSの語用論的な要因の一つに挙げられている強調(Baker&Jones 1998)の効果を生み出しているのではないかと考えられる。

《混合複合用言》

次に、日本語と韓国語のCSで生起することが指摘されてきた、「混合複合用言」(日本語あるいは韓国語の動詞に、もう一方の言語で「～する」「～だ」を意味する接尾辞が後接する形式)について見ていきたい。

これまで、オールドカマーの談話で生起されることが確認されてきたが、「ニューカマー」に属す、臨界期以後に来日した高校生の談話でも、日本語の名詞や形容詞に韓国語の接尾辞「-hada (する)」や「-tanghada (される)」が後接するタイプの混用複合用言がのべ12語現れていた(吉田 2005)。今回の調査から、留学生の会話でも臨界期以後に来日した高校生と同様、混用複合用言が出現することが明らかになった。表5は留学生の談話資料に現れた混用複合用言である。

表5：日本語+韓国語接尾辞の混用複合用言

日本語名詞／ 形容詞／動詞＋ 韓国語「-hada」	前節要素の品詞	回数
一人暮らし하다	名詞	1
리바이즈하다	名詞	1
びしょびしょ하다	名詞	1
迷惑하다	名詞	1
聞き逃し하다	転成名詞 (連用形)	1
甘え하다	転成名詞 (連用形)	1
誘い하다	転成名詞 (連用形)	1
細かい하다	形容詞 (基本形)	2
怪しい하다	形容詞 (基本形)	1
抱える하다	動詞 (基本形)	1
合計		11

「-hada」に前接する要素の品詞としては、名詞・転成名詞・形容詞・動詞が存在していた。形容詞と動詞の形態は基本形であったが、動詞の連用形から派生した転成名詞も見られた。金美善(2001)は、「動詞の基本形が前接要素として用いられたのは、生野区周辺一世のみならず(中略)『-하다』をframeとして持つパイリンガルに共通して見られる現象である」と指摘する。また、生野区周辺の一世の間で動詞の連用形が前接要素として用いられた理由について、以下のように述べている。

日本語の動詞連用形の持つ意味的、形態的特徴から起因するものであると考えられる。つまり、日本語の名詞には動詞から派生した転成名詞が多く存在し、意味や形態の面で名詞的に用いられやすいことから、一世にとって日本語の動詞の連用形が名詞的成分として「-하다」の前接要素になるということである。従って、このようなパターン「J+하다」混用形式は、一世以外にも日韓両言語併用話者の共通的特徴であるといえる(金美善 2001)。

留学生の混用複合用言の前接要素として、動詞の連用形から派生した転成名詞（「聞き逃し」・「誘い」・「甘え」）が見られたのも、金美善（2001）が上で述べているように、日本語の動詞の連用形を名詞的成分として、「-하다」の前接要素として使用していると説明できるだろう。

今回の談話資料中、日本語の形容詞への CS はのべ三回現れたが、三回とも混用複合用言の形で文中に挿入されていた。日本語の動詞への CS は二回現れたが、一回は混用複合用言で文中に、もう一回は動詞の原形の形で文末に現れていた。以下は日本語の動詞「抱える」に「-hada」が後接した混用複合用言の例である。

(9) FS6 : 그러니까 막 더 스트레스를 나 혼자 그거를 抱える하는거지.

(だから、やたらにもっとストレスを私ひとりでそれを抱えるんでしょう。)

今回の談話資料から、日本語の用言が文末ではなく文中に挿入される場合に「-hada」が付加される傾向がみられた。つまり、文中で活用させる場合に、挿入された日本語の用言で活用を示すことはせず、韓国語の接辞「-hada」で用言の活用を表示するのである。

6. おわりに

5章では留学生の談話における CS の実態を考察した。その結果、留学生の談話では主に韓国語が使われており、混用コード（文内 CS を含む発話）が使われる場合も、その基盤言語は多くの場合、韓国語であることが分かった。混用コードでは、韓国語を基盤として日本語の単語を挿入するという、挿入型 CS の性質が強いと言える。

上記の特徴は、臨界期以後に来日した高校生と類似している。ただし、臨界期以後に来日した高校生以上に、発話での韓国語使用の割合が高く、文内 CS での日本語の単語への切り換えの割合は低かった。つまり、臨界期以後に来日した高校生よりも留学生の方で使用言語がより韓国語中心となっているのである。

この理由として、混用コードが集団内のコードとして定着しているか否かが影響しているものと考えられる。民族学校の高校生の間では、日本語と韓国語の混用コードが集団内で広く使用されている。これは、民族学校の高等部では、学生たちの二言語の能力や日常的に使用する言語が多様であることとの関わりが強いだろう。すなわち、高校では、臨界期以前に来日した学生、臨界期以後に来日した学生、日本生まれの学生などが在籍しており、言語的にも非常に多様な背景を持つ学生がともに学校生活を送っている。日ごろから、そのような環境の中で二言語を使って相互にコミュニケーションをとっている。つまり、日常的に複数の言語が飛び交う学校に通う者たちの集団内のコードとして混用

コードが存在するのである。

そのような民族学校の高校生に対して、留学生は、韓国語を母語とし、臨界期以後に来日した人々である。母語や来日時期が多様な高校生に比べると、留学生は言語的背景が均質的である。そのため、高校生と異なり、お互いの意思疎通は韓国語だけで可能である。日本語の能力は非常に高いにも関わらず、使用言語は韓国語中心となっている。一方で、留学生は学校内では相手を問わず日本語を使用しようとする意識を比較的強く持っていることが明らかになっている(吉田 2010)。これらのことから、留学生は、場面に応じて韓国語あるいは日本語のうち一方を選ぶ(混用コードは避ける)傾向にあるのではないか。また、彼らは数年後に帰国する予定を持っており、韓国への帰属意識が強い人々でもある(吉田 2010)。そういった言語的な側面や心理的な側面が影響し、留学生において混用コードは集団内のコードとして定着していないものと考えられる。

今後の主な課題として三点述べる。一点目は談話の収録方法についてである。より自然な場面における談話の収録を行っていく必要がある。

二点目は、留学生とは習得環境や帰属意識の異なるグループのCSの特徴を明らかにすることである。例えば、生野区のオールドカマー一世の混用コード(金美善 2000)のように特定の集団において独自の混用コードが存在するのか。

三点目は、留学生や民族学校の高校生が卒業後も日本で生活しつづけた場合、CSのパターンはどのように変容していくかを探ることである。定住化とCSの関連性に焦点を当て、ニューカマーの言語シフトの様相を明らかにしていきたい。

参考文献

- Azuma, S. (1993) The frame-content hypothesis in speech production: evidence from intrasentential code-switching. *Linguistics*, 31. Mouton de Gruyter.
- Backus, A. (1998) The intergenerational codeswitching continuum in an immigrant community. In G. Extra; L. Verhoeven. (ed) *Bilingualism and migration*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Baker, C & Jones, S. P. (eds.) (1998) *Encyclopedia of bilingualism and bilingual education*. Clevedon: Multilingual Matters.
- 都恩珍 (2001) 「事例研究：日本語 - 韓国語混合文における日本在住コリアンのコードスイッチング」『日本文化学報』10, 韓国日本文化学会(韓国)
- 藤巻秀樹 (2012) 『「移民列島」ニッポンー多文化共生社会に生きるー』, 藤原書店
- Grosjean, F. (1982) *Life with Two Languages: An Introduction to Bilingualism*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Grosjean, F. (1995) A psycholinguistic approach to code-switching: the recognition of guest words by bilinguals. In L. Milroy & P. Muysken (eds.) *One Speaker, Two Languages. Cross-disciplinary Perspectives on Codeswitching*.

- Cambridge: Cambridge University Press.
- Gumperz, J. J. (1982) *Conversational code-switching*. In J. J. Gumperz (ed.) *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hamers, J.F. & Blanc, M.H.A. (2000) *Bilinguality and Bilingualism* 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hoffmann, C. (1991) *An introduction to Bilingualism*. London: Longman.
- 法務省入国管理局ホームページ <http://www.immi-moj.go.jp/toukei/index.html>
- 黄鎮杰 (1994) 「在日韓国人の言語行動 - コードスイッチングにみられる言語体系と言語運用 - 」『日本学報』13, 大阪大学文学部日本語学研究室
- 梶田孝道 (1994) 『外国人労働者と日本』, 日本放送出版協会
- 亀井孝他編 (1996) 『言語学大辞典 第6巻 述語編』, 三省堂
- 加藤剛編 (2010) 『もっと知ろう!!わたしたちの隣人—ニューカマー外国人と日本社会—』, 世界思想社
- 金静子 (1994) 「일본내의 한·일 2 언어 병용화자 (한국인) 의 Code-switching 에 대하여 ‘하다’ 와 ‘する’ 를 중심으로」『二重言語學會誌』11, 二重言語學會 (韓国)
- 金静子 (2000) 『在日 韓国人 一世税 韓國語・日本語 混用 實態 研究-大阪 地域聖 搔宿生稻-』崇實大學 校大學院國語國文學科, 博士論文
- 김경자 (2002) 『재일 한국인 1 세의 한국어 일본어 혼용 실태에 대한 연구 -오사카 지역을 중심으로-』, 태학사
- 金美善 (1998) 「日本在住コリアン一世の日本語—大阪市生野区に居住する一世の事例—」『日本学報』17, 大阪大学文学部日本語学研究室
- 金美善 (2000) 『日本在住コリアンの言語接触に関する社会言語学的研究 - 大阪市生野周辺をフィールドとして - 』大阪大学大学院文学研究科日本専攻, 平成 12 年度博士学位申請論文
- 金美善 (2001) 「大阪市生野区周辺日本在住コリアン一世の混用コード (チャンポンマル)」第 8 回社会言語科学会研究大会ワークショップ配布資料
- 金美善 (2003) 「混じり合う言葉—日本在住コリアン一世の混用コードについて—」『言語』Vol.32-No.6, 大修館書店
- 金美善 (2009) 「言語景観における移民言語のあらわれかた—コリアンコミュニティの言語変容を事例に」『日本の言語景観』(庄司博史・P・バックハウス・F・クルマス編), 三元社
- 小熊英二 (1995) 『単一民族神話の起源—「日本人」の自画像の系譜』, 新曜社
- 郭銀心 (2002) 「韓国の帰国子女の言語生活 (日本語と韓国語間のコードスイッチングを中心に)」『言語情報科学研究』7, 東京大学言語情報科学研究会
- Li Wei., & Milroy, L. (1995) *Conversational code-switching in a Chinese community in Britain: A sequential analysis*. *Journal of Pragmatics*, 23.
- Malik, L. (1994) *Socio-Linguistics: A study of Code-Switching*. Anmol Publications.
- Muysken, P. (1995) *Codeswitching and grammatical theory*. In L. Milroy & P. Muysken (eds.) *One Speaker, Two Languages. Cross-disciplinary Perspectives on Codeswitching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Myers-Scotton, C. (1993) *Duelling Languages*. Oxford: Oxford University Press.

- Poplack, S. (1980) Sometimes I'll start a sentence in Spanish y termino en español: toward a typology of code-switching. *Linguistics*, 18.
- Romain, S. (1995) *Bilingualism 2nd ed.* Oxford: Blackwell.
- Singh, R., & Backus, A. (2000) Bilingual Proficiency and Code-switching/Mixing Patterns. In Singh, R., (ed.) *The yearbook of South Asian Languages and Linguistics, 2000.* New Delhi: Sage.
- 宇佐美まゆみ (1997) 「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」 西郡仁朗・宇佐美まゆみ・樋口斉子 『日本人の談話行動のスク립ト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』(平成7年度～平成8年度科学研究費-基盤研究(c)(2)-研究成果報告書)
- 渡戸一郎 (2010) 「多民族・多文化化する日本社会-問題の所在とアプローチの視点」 渡戸一郎・井沢泰樹編著 (2010) 『多民族化社会・日本—<多文化共生>の社会的リアリティを問直す』, 明石書店
- 梁泰昊 (1996) 『在日韓国・朝鮮人読本 リラックスした関係を求めて』, 緑風出版
- 吉田さち (2005) 「二言語の能力とコード・スイッチング—韓国系民族学校の高校生を対象として—」 『社会言語科学』 8-1, 社会言語科学会
- 吉田さち (2010) 「韓国人留学生におけるドメイン別の言語使用意識—アンケート調査の分析から—」 『言語情報科学』 8, 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻

注

- (1) ここでの来日時期は、「西暦〇〇年代に来日した」という意味ではなく、臨界期以前、臨界期以後など、個人のライフステージ上のどの時期に来日したかを意味している。
- (2) 彼らは、「在日韓国・朝鮮人」、「在日コリアン」、「在日」などとも呼ばれる。
- (3) 臨界期については、提案者である Penfield & Roberts (1959) の9歳とする説や Lenneberg (1967) の12、13歳とする説など諸説ある。発達心理学の分野では、言語習得の過程で9歳になると困難になることがあると言われている。これに基づき本稿では臨界期を9歳とする。
- (4) 宇佐美 (1997) は、会話という相互作用における「文」を「発話文」と呼び、同一話者によって発せられた構造的に「文」を成していると捉えられるものを「一発話文」とみなしている。ただしフィラーとしての「そうですねえ」等のように、構造的には「文」であっても「一発話文」とみなされない発話も存在するとしている。